

道徳教育の教科化に関する一考察

松 木 久 子

Some thoughts concerninig being enforced on teaching moral education
as subject in especially public school

Hisako Matsuki

所属 幼児教育学科 Department of Infant Education

要約：公立学校において、道徳教育の指導のあり方が不十分であるという問題は、政権を担当する与党自民党の政治家たちにとって、長年の懸案事項となってきた。2018（平成 30）年からは小学校において、2019（平成 31）年からは中学校において、道徳教育が特別の「教科」としていよいよ指導されることが決定されている。しかしながらこの決定には、多くの問題が見え隠れしている。その問題とは何か、を明らかにしたい。

In this country Japan, moral education in public school has been highly controversial for many years especially in the ruling party the Liberal Democratic Party. Some politicians have wanted to enforce teachers in public school on teaching moral education. They decide to live up to their expectations, so from in 2018 at elementary school and in 2019 at junior high school moral education will start to be taught as subject, however there might be some big problems about that. I would like to clear up the problems.

キーワード：道徳教育，教科化，与党自由民主党政権，愛国心（主義）教育，検定（国定）教科書，

moral education, subject, the ruling party the Liberal Democratic party, education of patriotism or nationalism, authorized (government-approved[-designated]) textbook,

はじめに

2017（平成 29）年 10 月 22 日（日）に、第 48 回衆議院議員総選挙が行われた。何のための解散総選挙であるのか、といった疑問や大義名分無き解散総選挙など、安倍晋三首相の政治手腕や判断を疑問視する声も多々あった。背景にあることは、安倍首相自身が大いに関わる森友問題や加計問題といった、学園天国がらみの問題追究をかわす意味での国会開催における冒頭解散総選挙である、とのさまざまな評論家の人びとやマスコミ各社が解説する内容そのとおりの理由であったと言える。安倍首相自身は、第一次・第二次・第三次という自身の政権運営に対する評価を受けたい、といった後出しジャンケンめいた弁明を述べてもいた。

結果は周知のように、数的には現在の自民党・公明党という自公連立政権が維持される傾向が示されたが、一見圧勝とも言える結果を目にしながらも、安倍首相自身は元気が無く顔色は明らかにすぐれず、過去に突然首相辞任を申し出た際の記者会見時の顔色とよく似ていた、と思うのは筆者だけではなかったと思われる。今回の総選挙の結果は、これまで安倍政権に対して声を挙げたくとも挙げられずにいたサイレント・マジョリティー（silent majority）が、安倍政権の本質を問うための声を静かに挙げ始めたということを示していよう。事実、与野党が獲得した総得票数の割合は 5 割にも満たず、民意がより反映されていると言われる比例票においては、立憲民主党と希望の党が獲得した票の割合は、自民党が獲得した割合をはるかに上回っていた。さらに、ある新聞社か雑誌社が実施したアンケート調査においても、安倍政権を支持すると回答した割合は 3 割にとどまり、支持しないと回答した割合は 5 割以上という結果も示されている。

殊に誰もが感じ始めている現在の政治的な背景が世界全体を見てみても、1930 年代の状況と類似してきているということに対して、本能的に漠然とした危険を感じ始めていることの現れであると考えられる。筆者自身も 1930 年代の詳細な状況を実際に体験しているわけではないが、今回の総選挙の有権者のそのほとんどがそうではないにもかかわらず、何となく不穏な空気が渦巻いていることを本能的に感じとっている人びとが、少なからずいるということは間違いない。現在の安倍内閣においても、そうした 1930 年代の類似性のみごとに体現した閣僚もいる。「ナチス的手法を採用して現在の日本国憲法を骨抜きにすればよい」、との発言をした麻生太郎副総理・財務大臣などはその典型と言える¹⁾。今回の総選挙の結果は、現在の自公連立政権による数の論理の行き過ぎた手腕に対して、それなりの楔を入れたことにはなるだろう。これもしかして歴史の皮肉として翻れば、安倍首相が見直しを図りたいと常々考えている戦後民主主義教育の賜物と言えるが、そうした厄介な戦後民主主義教育を転換させようと試みるさまざまな目論見が教育界においては着々と進みつつあることを忘れるわけにはいかないし、忘れてはいけなと筆者は考える。

国政や地方政治の選挙結果のように、即日開票ということによって結果がすぐ判明するものと比較すると、教育における影響や結果というものは、じわじわと浸透していく傾向

をもっており、真綿で首を絞めるが如く数年後あるいは数十年後になって取り返しのつかない、大変な結果を生み出してしまう傾向があることを考えると非常に恐ろしさを感じる代物と言える。近代国家の原則として、「権力者は国民の良心にまで踏み込むべきではない」ということがあるにも関わらず、「心のノート」²⁾なるものを作り出し子どもの心を支配しようという国家の意図が丸見えの教材作りも、自民党の保守系政治家たち主導で行われ今日に至っている。

子どもの心の荒廃が叫ばれて久しいことは確かにあるが、単に道德教育のあり方を変えて人間の成長が異なるものとなるのであれば、あまりに短絡的考えに過ぎると思われる。歪んだ保守的な考えをもつ政治家の人びとの発想は、子どもを人間としてとらえているというよりは、ロボット的な機械ととらえている向きがあると思われる。それゆえ、自分たちが望む道德的価値観、例えば愛国心³⁾なるものでも示せば、そのとおり自分たちの思惑通りの子どもが出来上がると考えているようである。しかし果たして、そのようにうまくいくであろうか、と思う反面、何らかの影響がある程度与えられることをも考慮する必要もあろう。子どもたちが社会を映し出す鏡と考えるのであれば、子どもたちを取り巻き身近な環境として影響を直接おそらく与えているであろう、大人たちの心の荒廃をも云々する必要があろうというものである。

ましてやその国の顔でもあり国民の代表者と言われる日本の政治家の人びとの言動を鑑みれば、お世辞にも素晴らしいとは言い難い事象で満ちていよう。「このハゲー」なる発言を、いくら放った本人が追い詰められた状況であったとしても、世間一般から考えれば一見学歴も経歴も立派と考えられている女性政治家が発したことは、まさにそのまま本人にお返ししたくなる「違うだろー」という発言そのものである。下半身狂想曲のような不倫騒ぎの報道が連日のようになされる状況をみても、道德教育を強化し必要とされるのは子どもたちではなく、むしろこの国の政策決定に携わる政治家の人びとではなかろうか。極論すれば、大人も子どもの心も荒廃させることのない、国家の側が強制しなくとも自然に自分の生まれ育った国を愛して止まなくなるような、良い政治を志す必要性が政治家にあるとは言えないだろうか。昔から、他人に道德めいたものを説く人物にろくなものはいない、と言われる所以である。

次世代を担う若者たちに対する道德教育のあり方の困難さは、何も今に始まったことではなく、人類の永遠の課題とも言える側面がある。古代エジプトにおいても古代ギリシアにおいても、神殿内の落書きに「今の若い者はなっていない」という表現があると言われている。そこで本論文では、現政権が打ち出した道德の特別な「教科」化における問題は何か、ということについて考察を試みたい。道德教育はとかく政治の道具とされてきた歴史が少なからずあり、過去においては手痛い失敗に至ったこともある。しかしながら、一方で全く指導しない道德教育のあり方にも問題があろう。そのような諸々の問題についての一考察の試みである。

1. 道徳教育のあり方についての問題点

2つの某大学において夏季集中講義と後期開始の授業で、筆者が教職課程科目の一教科目である「道徳教育論」を担当して、かれこれ20年近くが経過しようとしている。毎年、授業の第一回目のオリエンテーションか第二回目の講義の際に、学生一人ひとりの道徳教育の経験を把握するためもあり、それぞれ小学校・中学校・高等学校でのあり方について、小エッセイ用の用紙に反映してもらっている。そこでここ数年、筆者として問題だと感じることは、すでに学生と筆者の間には年齢的に2倍以上の違いがあるにもかかわらず、ほとんど道徳教育に関する指導のあり方が同様なものであるということである。確かに、現政権が道徳教育の指導のあり方を問題視することに、ある程度、同意する点も筆者としてはある。ところで、筆者自身の道徳教育の経験はどうかと問われれば、あまりにも月日が経過したことに感慨深くなることに浸るまでもなく、しっかり学んだという記憶が無いというのが本当のところである。しかししっかりと学んだ覚えがないとは言え、自分自身の勝手な判断から申し上げることもおこがましいことであるが、筆者自身、道徳的に問題があるとは少なくとも思われたいし、周りの人びとに害となることを与えているという自覚も特にない。また、筆者と同じような道徳教育における指導を受けてきている、戦後生まれの人間一般についても、また学生の大半が特に問題があるとは思われたいし、人に対して害を与えているものがあるとも思われたい。

一応頼りない自身の記憶ではあるが、筆者が当時受けていたと思われる道徳教育の内容を挙げてみると、NHKの教育テレビで放映されていた道徳にまつわる題材が、随所に散りばめられている内容の映像を見て感想を書かされた思い出や、国語の教科書と少し違う傾向をもった読み物教材である副読本を読まされ、感想を担任教師に発言させられた思い出がある。また、お年寄りには親切にいなさいや電車・バスの中では積極的に席を譲りなさい、友達とは仲良くしいじめはよくない、正直であることは良いことだといった道徳観を学んだ思い出もある。今述べた思い出は主に、小学校における道徳の「時間」の思い出である。

あの頃は心が荒んでおらず意外にも純粹であったと言えるのか、実際に電車やバスの中でお年寄りに席を譲ったこともあった（現在は時と場合による）し、帰宅途中で道路で見つけた100円玉をわざわざ小学校に戻る形で交番のお巡りさんに届けたりしたことを思い出すと、それなりに学校での道徳教育の指導が多少は影響していたと考えられる。しかしながら、小学校でテレビ番組（内容はどうであれ）が見られることにウキウキしていたことも事実であるし、感想の内容が担任教師の意向通りであると非常にすんなりと道徳の「時間」が終わることに、多少違和感があったことも事実であるし、なぜ担任教師の意向通りに進んでいくことが良いのかという疑問は確かに芽生えつつあり、殊に自分自身の心の中で一向に晴れ晴れない事柄にぶち当たったときには、いつまでも心の中がもやもやしたままであったという思い出もある。つまり、どこことなく胡散臭さが道徳の「時間」にはある、という認識は着実に育っていたことは間違いない。特に、わざわざ小学校に戻る形で

交番のお巡りさんに届けた 100 円玉については、誰も見ていないこともあり自分のものにしてしまおうと一瞬思ったことも事実であったが、しかし正直でいなければならないと小学校で教えられた影響で届け出たところが、当のお巡りさんの反応は小額の小銭をわざわざ届ける必要は必ずしも無いというものであり、当時小学校 2 年生くらいの筆者としては、頭の中でクエスチョンマークがやたらと渦巻いていたことを思い出す。理想と現実は違う、所詮この世はきれい事だけでは済まされない、という重要で着実な思想の芽生えが、そのあたりから始まったことは確かである。その後から今日に至っても、たとえ見ている人がいようがいまいが、たまたま見つけたお金は小額であろうが大金（いつかはお目にかかりたいと内心思っている）であろうが、当該の場所に届け出て自分のものとして着服することはしていない。

家庭の事情もいろいろあり貧乏暇なしで、筆者の両親は共働きであったこともあり、小学校で起きた事柄の違和感や疑問については、当時面倒を見てくれていた母方の祖母に頻繁に相談した。そうした祖母との何気ない会話を通して、学校で学んだことがさらに強化された面もあれば、社会のいろいろな物事というものは、決して一筋縄ではいかず時代や見方によっていくらかでも変わるものであることを、筆者は同時に学んでいたと言える。この祖母がまた歴史好きということもあったため、第二次世界大戦（祖母にすれば大東亜戦争）についての話題は、多分に現在の筆者に影響を与えたことは確かであるし、そのことに関連して、特に学校の教師が言うことと教科書に書いてある内容は鵜呑みにするのはいかなものか、という指摘などについては今となっては深く感謝している。おそらく祖母自身も幼い筆者との関わりを通して、自分自身がかつて受けていた学校教育の内容を再吟味し、良い点もあれば悪い点もあるという複眼的な見方が可能になっていた、と今となっては判断できる。

このようにいろいろと筆者の体験を思い出してみると、小学校の時には確かにそれなりに道徳の「時間」が積極的に活用されていたように思われる。しかし中学校での道徳の「時間」の指導のあり方となると、非常に怪しさを帯びてくる。小学校に引き続き、副読本を活用しての指導はもちろんあり、あるいは担任教師が切り抜いてきた新聞記事における時事的な内容を活用した指導もあったと記憶している。最も小学校時代と異なる点は、中間テストや期末テストとの関わりの中で、テスト範囲に到達できていない科目の補習授業に道徳の「時間」が活用されていた思い出である。また、席替えや学校行事の係り決めなどの、一瞬どこに道徳との関連があるのか、という疑問が容易に浮かぶような活動に費やされたことである。ちなみに筆者は、小学校・中学校そして高等学校は、いずれも公立学校であり神奈川県立高校出身である。小学校と中学校においては、時間割の中に一時間必ず道徳の二文字が鎮座していた記憶があるが、その活用のされ方は先述したように全く異なる内容であった。先生方の道徳の「時間」に対する姿勢も、人それぞれという記憶があり、殊に筆者の世代の中学校における教育のあり方は、知識詰め込み教育であったことも影響しており、主要教科においてはいろいろと覚えることを強要されたのに対して、道徳の「時

間」の指導は決してそのような強要はなく、何となく教師がいつもと異なった態度になり、遠慮がちに自由に思ったり考えたりするのがよい、という点に重点が置かれ、いつもと異なる指導のあり方にある種の新鮮さが感じられた記憶もある。

高等学校においては、そもそも時間割に道徳の「時間」は設定されておらず、その代わりにLHR（ロング・ホーム・ルーム）や特活（特別活動）のような文言があったと記憶している。特に高校生の中には、直接に道徳的な価値の指導というような内容ではなく、同和問題や平和問題について、学年全員が映像を見せられて各自がそれぞれ考えるというような時間であったことを記憶している。いずれにしても、高校卒業後にダイレクトに社会との関わりが必要となることから、社会の一員として知っておくべき内容に焦点を当てた映像や、関わりのある人物の講演などを聴いたような思い出がある。このようなどこか曖昧な傾向をもったと言うか、お茶を濁すような傾向の指導のあり方の道徳では、現政権の特定の保守的な考え方をもち政治家たちにすれば、多分に不十分な道徳の指導のあり方と揶揄されそうである。当時も、いじめなるものは少なからずあったとは言え、現在のよう人を自殺に追いやるほどの酷さは無く、またいじめを受けたものも決して命を絶つようなことはしなかった。誰もが小学生は小学生なりの、そして中学生は中学生なりの、高校生は高校生なりの節度をもって困難な人間関係に悩みながらも、周りの人びとと関わりあっていたことは確かである。道徳的に見てどのようであったかということを確認に述べることは難しいが、周りの大人たちが眉をしかめる行動をとる生徒たちもいたが、そうしたことはいつの時代にも存在することは言わずもがなであると思う。

一方である程度の年齢に達した方々、つまりお年寄りの人びとの中にも道徳的にみてどうかと思う人びともいれば、さすがに国家を挙げての「修身科」教育の賜物と感心するような行動をとる人びとも確かに存在する。学校教育があたかも万能であるかのように、現政権の歪んだ保守的な考え方をもち政治家の人びとは考えるが、そんなことは単なる幻想に過ぎないと思われる。十人十色ということわざが表すように、学校の教師たちが言うことから生徒たちが受け取ることは人それぞれであり、十分に理解がなされるときもあれば、反対に逆説的にとらえられてしまうこともあり、決して一様にはいかないということである。子どもは、学校においてだけで学んで生活しているのでは決してないし、家庭にあれば両親をはじめとして兄弟・姉妹、あるいは祖父・祖母や叔父（伯父）・叔母（伯母）からの影響を受け、さらに自分を取り巻く周りの隣近所の人びととの触れ合いを通して学んでいる。むしろ筆者の経験したことではないが、学校で単純化して教えられた道徳観がそのまま社会一般に通じることは、まずないと言えるのである。そうした多様であることに我慢ならないと考える人びとは、いつの時代にも存在しているのであり、結局一時的には方策を打ち出してしばらくの間は、強制してうまく機能しているように見える瞬間があろうとも、いずれは綻びが現れまたさらに別の問題が生じてきていたことも、これまでの歴史がよく証明している。

現政権が打ち出してきた道徳の特別な「教科」化という背景には、何らかの歴史的そし

て社会的さらに政治的事象が影響していると言える。それはどのようなことであるのかについて、明らかにしていく必要があるように思われる。またここで少し考える必要性がある問題も、少なからず存在していることも確かである。それは、あまりにも日本の教育のあり方が、第二次大戦前と後で異なり過ぎてきたことにおける、悪しき弊害とも言えるものであろう。

2. 「歴史は繰り返す」という文言を考える

日本の学校教育における道德教育の歴史を、日本教育史を専門とする研究者たちの区分を参考に考えてみると、大体3つに区分することが可能である。第一期は、明治時代の1872(明治5)年の学制発布から、1945(昭和20)年8月15日の終(敗)戦までの時期であり、明治時代以来の「修身科」教授を中核とした指導が行われた時期である。この時期についてより詳細にみてみると、「修身」という教科が他の教科と同等に指導がなされた期間と、1880(明治13)年の改正教育令によって「修身」が筆頭科目となり最重要科目として指導されるに至った時期とに区分するとすれば、4つに区分できることになる。しかしながらここで重要なことは、「道德教育の政治的役割がはっきりしているのが、戦前の修身科だ」⁴⁾であることである。特に、1890(明治23)年の教育勅語制定以降、天皇崇拜と封建的儒教道德が子どもたちに徹底的に叩き込まれるようになり、さらに1904(明治37)年に教科書国定化がなされてからは強化される傾向となり、それが軍国主義と天皇制家族国家主義の精神的条件を提供したという苦い経験があることは周知の事実である。

第二期は終(敗)戦で「修身科」が廃止されてから1958(昭和33)年の学習指導要領道德編の公示までの13年間で、特設を伴わない全面主義の指導が行われた時期である。アメリカ合衆国を中心としたGHQ(General Headquarters, 連合国総司令部)は、日本を武装解除し民主化路線を歩ませるにあたり、真っ先に「修身科」を禁止することになった。その後は、一時期新しい生まれ変わった日本人の育成という観点から、公民教育を推進していたフランスの道德教育のあり方を導入することを試みようとした。しかし、やはりGHQの中心的な役割を果たしていたアメリカ合衆国の影響を強く受けたため、学校における教育活動全体を通して道德の指導を行うという全面主義のあり方が打ち出された。しかしながら、当時の歴史的背景そして政治的背景の影響から、全面主義の道德教育のあり方では不十分であるとの不満から、新たなあり方が模索されたのである。ここで確認しておくべきことは、日本の近隣諸国つまり中国が1949(昭和24)年に共産主義国家として中華人民共和国を誕生させることになり、翌年1950(昭和25)年には旧ソビエト連邦とアメリカ合衆国の代理戦争とも言える朝鮮戦争が勃発し、日本は否が応でも東西冷戦構造に組み込まれることになり、日本の戦後政治の転換点ともなった。日本はこの頃から、アメリカ合衆国を中心とした西側の自由主義陣営の中に組み込まれ、アジア諸国における反共の砦としての役割を担わされることになる。そうした背景を踏まえた上で、次の

第三期を見ていくと不思議と現在の社会的状況との類似が見えてくるかもしれない。

第三期は、1958（昭和 33）年以降から現在に至る時期となるが、道徳の「時間」特設を伴う全面主義の指導が行われている時期ととらえられる。朝鮮戦争の勃発とともに愛国心を強化しようとした政府の思惑により、かつての「修身科」に代わる道徳の「時間」を導入させようとしたが、「ただその時は教育課程審議会が反対したため実現しなかった。その後、審議会の委員を入れ替えて政府の意に沿う答申を出させ、1958 年になってやっと「道徳の時間」が導入されたんだ。」⁵⁾（下線は筆者による）という経緯がある。道徳の「時間」の位置付けは、他の教科との関係性を図りながら、道徳的事柄については道徳の「時間」において補充・深化・統合する「時間」となっている。さらに注目しなければならないことは、現在学校現場の教育のあり方に非常な縛りをかけていると言われている「学習指導要領」が、法的拘束力をもつようになったのが 1958（昭和 33）年告示による改定からであり、これ以降、「学習指導要領」の内容に従わずに学校で指導をした教員は処罰の対象になったのである。つまり、1947（昭和 22）年にはじめて作成された学習指導要領は、現場の教師が実践によって検討し修正していくための「試案」として位置づけられていた。法的拘束力をもつようになった「学習指導要領」は、約 10 年ごとの内容改訂を得て今日に至っている。現場の先生方はさまざまな制約を受けながらも、いろいろな工夫を凝らしながら道徳の「時間」をある意味上手に利用し指導をしてきていることは間違いない。

時の政府が行っていることは、過去においてもまた現在においても全く変わりがないと言える。いよいよ来年度より、第四期（あるいは第五期）という道徳の「教科化」という新しい時代を迎えようとしている、というよりも先祖返りになりそうな様相をはらんでいる。周知のとおり「今回の「教科化」も政治主導で、中央教育審議会は当初「教科化」には慎重だった。2012 年に第二次安倍政権が成立してから、首相の私的諮問機関である「教育再生実行会議」が強力に「教科化」を推進したんだ。」⁶⁾（「」は筆者による）というように、第三期における動きとまるきり同様であり、まさに歴史は繰り返していよう。道徳教育の充実が改めてクローズアップされるようになったのは、2011（平成 23）年に滋賀県大津市で起きた中学生へのいじめ自殺がきっかけと言われている⁷⁾。今回の道徳の「教科化」の表向きの理由は、いじめをなくすための措置であると言われている。しかしここで思い出すべきことは、確か子どもの心の荒廃が懸念されるということから子どもの心を豊かにする名目で、2002（平成 14）年に「心のノート」が鳴り物入りで登場し、道徳教育の補助教材として全国の学校に配布されたのではなかったか。それから約 10 年が経過し、子どもたちの心は豊かになったのではなく、さらに荒廃に拍車がかかったということになるのでは、誠に皮肉以外の何物でもない。道徳の「教科化」がなされるということは、また 10 年後には・・・と考えると、「教科化」された過程をみてもまったく腑に落ちないことだらけであり、「教科化」したところでいじめは果たして全く無くなるものであるのか、今からとてもその結果が楽しみでもある。きっと、いじめ自殺をする子どもは一人もいなくなることであろう。

筆者が「歴史は繰り返す」という文言を引っ張り出したのは、現在の道徳の「教科化」という動きが、非常に明治時代の「修身科」の扱い方に似ている点があると思うからである。小学校の教科等の種類の推移を見ても、「学制」の発布とともに他教科とともに登場した「修身科」は、1880（明治13）年の改正教育令発布後、1886（明治19）年からは「修身科」は「筆頭」教科として位置付けされ、終（敗）戦までその体制が維持された。1889（明治22）年には大日本帝国憲法が公布され、翌年1890（明治23）年には森友問題で話題となった「教育勅語」が渙発されることにより、「筆頭」科目として躍り上がった「修身科」において、徹底的に天皇制家族国家主義が洗脳されていったことは周知の事実である。それはまるで、1894（明治27）年には日清戦争が起こることに対する精神的身構えのまずは練習であったであろうし、その後約10年をかけて着実にその歩みを強化しながら、1904（明治37）年に教科書国定化がなされ、同年には日露戦争も勃発し、いよいよ本格的に軍国主義に拍車をかけながら、一億総火の玉となり1941（昭和16）年の真珠湾攻撃へと突進していった経緯と重なりそうだからである。「昭和初期、国家主義のナショナリズムをかきたてていた時代、国家の権力側にある人たちは、まず教育に手を出しましたよね。国家主義を育成し、さらに進展させるときには、教育改革から始まるわけですよ。」⁸⁸、と昭和史の研究者である半藤一利氏も指摘している。筆者が、同じような歴史を繰り返すことになるのではないかと懸念するのは、殊に大学受験の体制にも問題があると思われるのであるが、このあたりの特に近・現代史について我われ日本人は十分に学んでいるとはいえないからである。

しかしながら、歴史について十分に学べば過去を繰り返すことがないか、という単純発想でも問題解決にはならないであろうと思われる。なぜなら、我われ日本人とは比較にならないほど、特に第二次世界大戦におけるナチスによる蛮行について学んでいると思われるドイツにおいてさえも、ネオナチの台頭は相変わらず存在し続けているからである。それでも筆者としては、同じような歴史を二度と繰り返さないためにも、道徳の「教科化」について考えざるを得ないのである。戦前・戦中の「修身科」による教育や戦後の道徳教育について、改めて振り返ることが最初の一步となるであろう。悲観していても始まらないが、同時に興味深いこともあるとも言える。それは指導する側は、自分たちが経験してきた教育に影響されながら、次世代を教育あるいは指導していくことは間違いないからでもある。だからと言って諸手を挙げて、戦後民主主義教育を賞賛することも憚られることも否定しない。このことは、安倍首相が指摘するまでもない。

そこで参考になりそうなことは、北野武氏が次のように述べている文言である。「道徳は将来の理想的な国民を育成するための道具ではないはずだ。一にも二にも、子どもの成長や発達のためのものだろう。今の道徳教育は、子どもはこうあらねばならないという型がまずあって、その型にむりやり子どもを押し込めようとしているみたいだ。」⁹⁾ マルチな才能をもちいろいろな方面で活躍しながら、時には道徳的に眉をしかめるような行動をとる北野武氏ならではの、道徳に対する鋭い指摘であろう。他にも、例えば「第一章●道

徳はツッコみ放題」や「第四章●道徳は自分で作る」などは、特に参考になると言える。この著書を読んで全く笑えないようであれば、道徳について語ることはむしろ危険であろう。学校教育においては確かに、型にはめるような道徳のあり方が不適切であることは言うまでもない。しかしながら、祖母がよく筆者に言ったことも一理あるように思われるのである。それは、「お前が自分で判断できるようになるまでは、大人である自分がある程度口うるさく教える必要がある。」と言ったことである。だいたい筆者自身が、10歳前後のことであったように記憶している。

おわりに

そもそも論となり得るかもしれないが、学校において道徳を指導する必要性があるのか、という考え方である。これは、「道徳教育論」の授業において学生に反映してもらう、小エッセイの内容の中でも然りなのである。つまり、そもそも道徳めいたものは家庭において、指導されるものであるのではないか、ということである。日本は世界的にみても、学校において熱心に道徳が指導されるという点が、非常に特殊性を帯びていよう。他の国々においては、学校での指導に代わって、家庭や教会などの地域社会が果たす役割が大きいと言われる。日本においてことさら「学校」、「学校」と強調され強制するのは、何かをなそうとする政府の意図が見え見えであると考えられはしないだろうか。歴史的に鑑みて、一般に日本人の子育てや指導のあり方が、キリスト教布教のために日本にやってきた外国人宣教師たちの目から見て、欧米のあり方よりも優れていると思われた時代も長い間あったからである。また、江戸時代の幕末において近代化を推進しようとした指導者たちは、例えば佐久間象三が言ったとされる「西洋の学問、東洋の道徳」ではないが、道徳的な面においては先に挙げた外国人宣教師たち同様に、問題無いと考えられていた節もある。やはり時の政府が特定のことを成し遂げたいと考えたときに、学校での道徳教育のあり方が特殊性を帯びてくるということになるのではなかろうか。

しかし近年、家庭での教育力が落ちていることもまた然りである。「心のノート」は、実はそのことをも反映して作成された経緯もある。確かに一昔前には、「型破りな人間」という言葉をよく聞いたが、最近あまりよく聞かなくなった。日本の伝統芸能の代表的な歌舞伎を例に挙げれば、歌舞伎役者を目指す人間は幼い頃から、歌舞伎の「型」をいやと言うほど身に付けさせられる。そうしたことの基礎がしっかりしていない限り、いくら顔立ちが格別に良いとしても素晴らしい役者にはなり得ないと言われている。筆者の祖母が経験上理解していたことにもつながるが、ある程度子どもが自分で判断できるようになるまでの家庭での教育においては、道徳の第一歩と言える「しつけ」がしっかりとされる必要性はあるだろう。家庭での子どもに対する指導が不十分であることは、昨今否めないことは確かである。しかしそれだけを理由として、学校が家庭に代わる存在として、道徳の指導を強化すべきと考えるのも違和感が非常にある。

今後の学校における道徳の「教科化」については、誰もがそのあり方に目を光らせていく必要があるだろう。しかし昨今の、「アクティブ・ラーニング」ブームのあり方を見ていくと、気掛かりなのは、いつの間にか政府の言いなりになっているあるいは政府を言いなりにさせているのかどちらであるかわかりかねるが、教育に関する審議委員のメンバーの偉い先生方の口車に乗せられて、一つの決まった方向に内容が傾きはしないかということである。過去のことについてあまり反省しない観のある我われ日本人は、いやと言うほどそのような方向で今までも歩んできてはいないであろうか。みんながみんな同じ方向を向くことを、疑問に思う必要があるように感じる今日この頃なのである。

註

- 1) 礪川全次著、『「ナチス憲法」一問一答 ―ワイマール憲法の崩壊と日本国憲法のゆくえ』、同時代社、2017年、3頁
- 2) 三宅晶子著、『「心のノート」を考える』、岩波ブックレット、No.595
2002（平成14）年から道徳教育の補助教材として全国の学校に配布されたが、民主党政権時代の仕分け作業の際に配布が中止された。その後、第二次安倍政権で復活、2014（平成26）年からは改訂版の『私たちの道徳』が配布されている。
- 3) 鈴木邦男著、『＜愛国心＞に気をつけろ！』、岩波ブックレット、No.951
- 4) 碓井敏正著、『教科化された道徳への向き合い方』、かもがわ出版、2017年、25頁
- 5) 前掲書、22頁
- 6) 前掲書、22頁から23頁
- 7) 松本美奈著、『No.1910 教育ルネサンス「教育再生」の予算2』、読売新聞、2014年（平成26年）4月19日（土曜日）記事他
- 8) 半藤一利、保阪正康著、『ナショナリズムの正体』、文春文庫、2017年、54頁
- 9) 北野武著、『新しい道徳 ―「いいことをすると気持ちがいい」のはなぜか』、幻冬舎、2015年、134頁

【その他の参考文献】

- ・浪本勝利、岩本俊郎、佐伯知美、岩本俊一編、『史料 道徳教育を考える』、北樹出版、2010年（3改訂版）
- ・教育史学会編、『教育勅語の何が問題か』、岩波ブックレット No.974
- ・平井美津子著、『教育勅語と道徳教育 ―なぜ、今なのか―』、日本機関紙出版センター、2017年
- ・想田和弘著、『日本人は民主主義を捨てたがっているのか？』、岩波ブックレット No.885
- ・中西新太郎著、『保育現場に日の丸・君が代は必要か？』、ひとなるブックレット No.3
- ・辺見庸著、『完全版1★9★3★7（上・下）』、角川文庫 20059、平成28年

